溫故新集

嘗良初三次郎

喰初の次第

一　男女ともに生れて百廿日ハ百日の吉日を
以て撰良辰を喰初すべし

一　男子の時ハ男抱べし　女子ハ女の
役之候者ハ膳を抱出すると喰初
乃親類又ハの傍に座前に膳を据べし

一　膳の取様ハましく喰はさす生飯を

猶重出ル時ハ盃を親の前へ持まいらす
親一献のミて子ニさす子三献呑て下ニ置出
ことあるへし 又一献加へ返して親二献
のミて納る也 然ハ吾能々心得へき事也
又後ハ子の方よりは後見ニ名乗て出
乃盃有へし 此盃の段取出し
後見の人ニ於ては酒盛あるへし 口伝

一 女子の時ハ女房衆よるへし 祝作大概
同前にて引出物ハ何ニても似合の義を
とるへし 不結合肝要也 口伝
一 髪置の次第
一 男女共ニ三歳と云霜月十五日擬
良辰祝儀有へし
一 祝儀の次第 箱の蓋ニ帯ときみ盛

髻にて男結

水引にて女結

一 二方ニ立置ニ二ッ小角ニ居ル也 但シ
女人ハ居時胡麻と髪包の親ハ持参
其ノ親ニ盃のミ子の子へ其子ニ盃也

納色し 次ニ男出テ胡麻と子のよ父へ
持参して子ニ盃のミ親ハ其親ニ盃のミ
納へし 次ニ獨身なれハ胡麻と親の
前へ持参して親一盃のミ子のハ其子へ其
子二盃呑テ又ハ川ニ置テ次へ盃まで
一盃のミ親ハ又其親一盃のミ納色し
女ハ其のミ候元朱ニ二ッの前へ持参也

居者ニ出列の時ニて後ハ上下外ハ黒き
ニ浅色ニ候

一 女子の付き女房ハ役人之時ハ黒の衣ん
より擬切く袴の縫付模様同前に候

一 雑方ニハ振袖の人其の後ハ年へし

一 袴の以後振袖ハ二十人の色々
色へし候

袴衣の事

一 衣紋と云霜降半月擬良長袴衣可之へし

一 青襖袴扇刀ハ袴衣の親分居士こ
原出とも青襖の深衣ハ袴衣紋作し
家乃紋を付へし色ハ大方かゝん
白々色し又時色ハ其時へし

一 袴衣の人ハ白衣く袴も其出色しるん

右親返して親ニ酌の三納髪を結ふへし

一 真の髪結様の事 髪のかしら髪
けニ毛前ニて男結ニして折返し端を
切らはさて髪を三ッニ分後にて太と左結

一 右と男結ニして端を切ニ前ニて

一 折返し結端を切結右先同前し

一 扨一三分宛後ニて皆結端を切結候

右先同前ニて又六分ほと毛紙ニ包
中毛と前ニして水引一筋ニて折返し
結端を切右先同前但前ニ水引ニて結

一 髪を毛紙ハ烏帽子親分ほと返へし
扨示と髪ニ折 又横ニ折端ニかゝと（右まき方の事ニ記すと一ッ折）

一 一ッこれニまき毛折ニ二ッ様一ッの紙のか

一 ミ〇の同ニ右ニ文字と書（一ッかゝ

右にて云字よし書かん字揃ふあるへし

一 髪とて色時又は色には名と書付の字

しくとも太く色ばかりに書付の方に通へし

一 羽の髪結様は手本を真のごとく

結ぶ事を後にして女結にしておき

返し結と印すこれを結ぶと記して

男結にして折返し結と印す

こし次を後にして女結は少なく結ぶと

一 切こする男結にして前をかくして

結ぶとまうして二三分離れ

外に覚えのごとくを折りにて折返し

女結にして結ぶとこそ次にも折

りにて男結にして折返し結ぶと印さるへ

一 草の髪結様は手本を前のごとく

真
男結
男結
男結
男結
男結
女結
女結
女結
女結
七寸

行

草

男結
女結
男結
女結
男結

一 髪を結事ハ元服したる人の同前
又若衆役なり
一 髪をしやれ時常の髪の事本ハ柳
とも長サ壱尺弐寸巾七寸ニ厚サ六寸位
入角ニ紙を入へし結
一 新髪小刀としては松原を紫子ニ打まく
様ニ打柄を巻毛表の方にかへると

一ツ元結にて二所結通し結目ハ小刀
ノ表の方ニなすへし柄元の紙の余りハ
裏ニ打返し結通し
一 髪戴きて付後見の人脇の小刀ニ抱
掛て居て烏帽子親の前へ髪をとりて
差付置へし元服親前へ送へ
但烏帽子元服の時ハ親元服て戴

一 疑なくて二疵のゝ間へしおまるゝ

乃為白之へし

一 同前の事 当的ハ三星之中最

越へハ七星本出して越色しる

一 同文明也と同前中にし後乃の人

をも以へ書と言之へし此ほと記個

かも申之へしとさまてのもとのおかや

多くひの為仰付へし

小笠原大膳大夫

長時

同 右京大夫

貞慶

右此一冊有雖為秘事

依州執心深懇記進之

平努々不可有外見者也

水鴻卜也 之成

横山三郎右衛門 時連

平川勘右衛門 高連

原田鴻円 元陳

村田小平太 信峯

寶暦拾三癸未年十月

津村佐文部度